



# 否認

堀田 力

Hotta Tsutomu

読売新聞社

# 否認

——どうして言わないの

一九九三年（平成五年） 六月 二十六日 第一刷  
一九九三年（平成五年） 九月 十一日 第三十刷  
著者 堀田 力

編集人 岡野敏之

発行人 中保 章

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―一 〒100―55  
大阪府北区野崎町八―一〇 〒530  
北九州市小倉北区明和町一―一二 〒802  
名古屋市中区栄一―十七―六 〒460

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

●落丁・乱丁の場合は、お取り換えいたします。  
●定価はカバーに表示してあります。

©1993, HOTTA Tsutomu  
ISBN4-643-93047-0 C0097 Printed in Japan

定価1500円

## 目次

### プロローグ

5

### 第一章

否認の動機

7

### 第二章

否認の戦略

57

### 第三章

否認の攻防

133

### 第四章

自白の条件

223

### あとがき

297

## 法廷の黒板

| 公訴事実                     |         | 仕入伝票     | 接待    |
|--------------------------|---------|----------|-------|
| I, 1000 万                | × 月 × 日 |          | ① 鯉茶屋 |
|                          | × 月 × 日 |          | ② 鯉茶屋 |
|                          | × 月 × 日 | ① 3330 万 |       |
|                          | (7 日後)  | (岡田)     |       |
|                          | × 月 × 日 |          | ③ 鯉茶屋 |
| II, 3000 万               | × 月 × 日 | ② 1650 万 |       |
|                          | (翌日)    | (岡田)     |       |
|                          | × 月 × 日 |          | ④ 鯉茶屋 |
|                          | × 月 × 日 | ③ 3800 万 |       |
|                          |         | (不詳者)    |       |
|                          | × 月 × 日 | ④ 425 万  |       |
|                          |         | (岡田)     |       |
|                          | × 月 × 日 | ⑤ 1265 万 |       |
|                          | (2 日後)  | (不詳者)    |       |
|                          | × 月 × 日 |          | ⑤ 鯉茶屋 |
| ----- (× 月 × 日 入札) ----- |         |          |       |
| III, 1500 万              | × 月 × 日 | ⑥ 1770 万 |       |
|                          | (2 日後)  | (不詳者)    |       |
|                          | × 月 × 日 | ⑦ 3500 万 |       |
|                          |         | (岡田)     |       |

否

認

どうして言わないの

装丁 岡邦彦

作中の会社名、人名はすべて架空のもです

# プロローグ

この汚職事件の摘発は、匿名の投書からはじまっている。

検察庁は何をしているのですか。佐藤工業の連中が、大阪から次々にやってきて、わが滋賀県のおえら方を酒と女でたらしこみ、琵琶湖の水処理の工事を落札したのを知らないのですか。それとも、県のおえら方とつるんでから、見て見ぬふりをしてるのですか。

だいたい、あの工事をやる会社が大津市内だけで三社あるのに、大阪の佐藤工業が落札したというだけで、疑問を持つて調べるべきです。しかも、佐藤工業が、いい加減な工事してるから、設備が倒れて作業員が怪我をする事故が起きたのです。なのに、警察も検察庁も、事故の調べだけして、な

ぜそんないい加減な会社が落札したかという根本のところを調べていない。それでも検察庁は、正義を守るところと言えますか。

接待の場所は、大津市内の鯉茶屋です。このことは、たくさんの人が知っています。しっかりと調べて下さい。滋賀県庁には、腐った奴がトグロをまいていて、真面目な業者がひどい扱いを受けているのです。

大津地方検察庁検事御一同様

## 第一章 否認の動機

### 一

夏の明るい月から身を隠すようにして、高野ジュンはひっそりとしやがんでいた。足もとで、地の虫が鳴いた。

ジュンの眼は、まっすぐ大津地方検察庁の建物に注がれていた。夜の九時が過ぎたというのに、ひとつだけあかりのついている部屋がある。

検事の前で首うなだれている父、万治の姿を思い浮かべると、ジュンの胸はキュンとしまった。父はのろまなぐらい慎重で、口下手だから、言いたいことも言えなくて、検事に叱られてばかりいるにちがいない。

万治が留置されている大津署に差し入れに行った時、刑事が「担当の検事は若くてバリバリやるので評判の人だよ」と、教えてくれた。ジュンは、まだ見たことのないその検事の眼が二つ、きつと光って自分を見すえているような気がして身ぶるいした。本当に、お父さんて、バカなんだから……万治が逮捕されてから何十回となくつぶやいたそのつぶやきが、また出た。

ジュンから見ると、父の万治は、営業部長といった柄ではない。セールスにも向かないし、部長にも向かない。会社の隅っこの方で、こつこつと真面目に経理でもやってるのが一番びつたりだと思う。それが、どうした風の吹きまわしか、営業部長の地位についたものだから、たちまち汚職にまきこまれて、つかまってしまったのだ。

「ほんとにドジなんだから、お父さんたら……」ジュンはつぶやいた。

近くを走る国道一号線を、大型トラックが地ひびきを立てながら走り過ぎていった。ジュンは立ち上がった。遠く琵琶湖の水面に、月の破片がきらめいている。ジュンは検察庁の建物の裏手の方へ、ゆっくり歩いた。そこにはジープが止まっていた。見慣れた大津署の押送用ジープである。

しばらくたたずんでいると、裏の出入口のあたりに人の気配がして、三、四人がひとかたまりになって出てきた。ジュンのところからはシルエットのようにしか見えないが、ジュンはめざとく父の姿を見つけた。体格のいい二人の警察官にはさまれた万治は、背が低く、しかも前かがみになっているので、すぐわかった。

「お父さん、もつとシャンと歩いて！ 何も自分のために悪いことしたわけじゃないでしょ？ お父さんは会社の犠牲者じゃないの！」

ジュンは心の中で叫んだ。

万治の方でも、すぐジュンに気づいたようだった。一瞬立ち止まって、じつとこちらを見て、思いなしか、一、二度うなずいたように見えた。「大丈夫だよ」「すまないね」と言っているようでもあった。

万治は、警察官に押しこまれるようにジープの後部ドアから中に消えた。背中をまるめた父の姿が、急に老けたように見えた。万治が手錠をされているのか、腰にゆわえたヒモをもたれているのか、そこまでは見えなかったが、若い警察官にがっちりとりえられているのはたしかなことである。

ジープが走り出すと、ジュンは、そのまっくらな後部の窓を見つめながら、同じ方向に歩き出した。みるみるその窓は遠ざかり、ジュンの大きな眼に、大粒の涙が浮かんた。

## 二

ジュンの父、高野万治は京都に住み、大阪にある佐藤工業に勤めている。

社長の佐藤孫八郎は同社の創業者である。創業当時は、京阪地区の自治体の土木工事を中心に手がけていたが、昭和四十年代に公害問題が全国を吹き荒れる中で、環境整備に力を入れはじめ、会社は急成長した。

そのころ、創業当時から社長の右腕になっていた万治の父親が急死し、大学の経済学部在籍中の万治は、家計を助けるために中退、その時に社長に拾われるような形で、佐藤工業に入った。万治は滋賀県の大津警察署に逮捕されて一か月になる。滋賀県庁の開発部長をしている小野田

敏夫に、一千万円の賄賂を贈った容疑で逮捕されたのである。

最初、大津署に逮捕されたのは、万治の部下で、環境機械課長の相茶太郎だった。相茶は、滋賀県が琵琶湖周辺の環境整備・総合開発をめざして行う約七十億円の工事を佐藤工業が受注できるように、いろいろと便宜をはかつてもらいたいという趣旨で、小野田開発部長を何回か料亭などで接待したとの疑いで逮捕された。調べに対して相茶は、接待は上司である万治の指示で行い、小野田に現金を渡したこともあると自供した。それで、万治と小野田が逮捕された。万治と小野田の写真が、地方紙のトップに出た。

逮捕されて二十二日目に、万治は、大津地方裁判所に起訴された。起訴したのは、大津地方検察庁の大原修という若い検事である。一千万円の贈賄容疑による起訴だったが、まだほかにも同じような贈賄の疑いがあつて、それを調べる必要があるのです、万治は保釈してもらえない。

「いつまでかかるのかしら、調べつて？」

ジュンは、母の波子にきいてみるが、波子は答えられない。

「いろいろ難しいことがあるんやろし……」

思つたとおりの答えである。ジュンは、ほっそりした眉を寄せて、

「難しくなんかいいわよ。何回お金をもつて行つたのか知らないけど、せいぜい数回でしょ。どうしてそれくらいのこと調べるのに、二十日もひと月もかかるのよ。毎日、夜の九時過ぎまできいてて、まだ調べられないのかしら。できる検事だつていうのに……」

ジュンは、東京のミッシェン系の短大で二年間の学生生活を送り、この春、京都に戻り、小さな会社に勤めはじめたばかりで、二十一歳になる。ジュンには兄がいたが、高校時代に交通事故

死しているため、父親の愛情を一身に集めている。小さいころから、好ききらいをはつきり言う娘だったが、母の波子に言わせると、東京弁を使うようになって、よけい男みたいな言い方になったという。

「わたし、明日、弁護士さんのところへききに行くわ」ジュンは父のことを思うとじつとしていられなくなり、波子に言った。

万治の弁護士は、京都に事務所をもつ曾根吐夢そねとむという独身の青年である。佐藤工業の取引先の社長の息子だということで、佐藤社長が頼み、万治の弁護人に付けた。

「吐夢だなんてアメリカ人みたいな名前ね。そんな名前をつける人の子だったら、本人もおしゃれな考え方をする人じゃないかしら……。それとも、名前負けしちゃってすぐ野暮やばつたい男かも……？」

ジュンはそんなことを考えながら、白のブリーツスカートをゆらめかせて、河原町通りに出、曾根弁護士事務所のあるビルの狭い旧式のエレベーターに乗った。

事務所へ通じる廊下は薄暗く、事務所のドアはくすんだ感じで、ジュンは、雑布ぞうきんをもってきて、すぐにでも拭きたい衝動を覚えた。ドアを開けると、受付兼用の秘書の机らしいものが置いてあったが、そこに人はおらず、奥の部屋が見通しで、窓際の机に三十歳ぐらいに見える男が一人座っていた。

ジュンは、その男と眼を合わせたたん、*「名前負けしてる方だ」*と直感した。

男は、のっそり立ち上がって、

*「どうぞ」*

と言った。古めかしい事務所にふさわしい感じの男である。

ジュンは、すすめられたソファのほこりを、ハンカチでふいてから座りたいと思ったが、それは我慢した。

「曾根です。どうぞよろしく願います」

と丁寧と言った。ジュンは、あわてて、

「高野ジュンと申します。このたびは父がいろいろお世話になっております」と挨拶した。

曾根は、しばらく、眼の前に座った若い女性の身体から発せられる見えない放射線の強さに打たれて、どう口をきいていいかわからなかった。それは華やかな、そのくせ、すごく清潔な、かぐわしい放射線であった。曾根は、生まれてはじめての感じに、とまどった。

「わたし、お願いにきました」

ジュンは、少し甘い声で言った。

「はい、何でしょうか」

曾根は、のどのかわきを覚えながらそう言った。

ジュンが、あきれたような顔をした。

《何でしょうか、ですって……。保釈のことに決まってるじゃないの。娘がいま思うことといえ  
ば、一日も、一刻も早く父親を留置場から出してほしい、ということ以外にあるかしら》ジュン  
は心の中で言った。

「父の保釈です」

「保釈ですか……」

曾根は、ちょっとためいきをつくように言った。

「もう、起訴されてから十日になります。起訴が済めば保釈されるときいていたんですけど……」

「いや、そうとはかぎりません。それに、お父さんの起訴は、まだ全部は済んでいないんです」

「いつ、済むのでしょうか」

「まだ、はっきりしません」 曾根は、申しわけなさそうな顔をした。

「わたしは、父に早く帰ってきてほしいんです。父がいつまでもあんなところに入れられて、罪人みたいに調べられるなんて、耐えられないんです」

ジュンの強く光る眼が大きくみひらかれて、曾根を直視した。曾根は何度もうなずいたが、ジュンのまっすぐな視線ははずれない。

「お父さんは、罪人と決まったわけじゃありません」

「そんなこと、いま問題にしてるんじゃないやありません。父を早く帰してほしいのです」

しばらく考えて、曾根は、

「わかりました。また検事に会って、様子をきいてみましょう。このあいだも頼んだばかりなんですけど……」

ジュンはやつと納得した顔をしたが、すぐ心配そうにきいた。

「保釈になると、お金を積まなきゃいけないんでしょう。どれくらいですか」

「さあ、それは裁判所で決めることで、どうも、これくらいとは言いきれませんが……」

「でも、相場っていうんですか、大体の基準額のようなものがあるんじゃないんですか」

「まあ、それもあるような、ないような、で……」

「母がはっきり言わないんですけど、うちでは沢山のお金は都合できないみたいに思うんです。裁判所は、そういうことも考えて、都合できる程度の額にしてくれますでしょうか」

「そりゃ、そういうことも考慮してくれますが……保釈金は、会社が積んでくれるでしょ」

「そうですか」ジュンは、安心した声を出したが、「曾根先生は、会社が出してくれるってこと、確認されたんでしょうか」ときいた。

曾根は、そうきかれて、まじまじとジュンの顔を見た。頭がよく回転する女性ひとだな、と思った。「そう言われれば、確認はしてないけど……しかし、当然、出すべきだし、出すと思いますよ、あの社長は」

「そうですか、わたしは、父がいつか、佐藤社長はすごいしまり屋だって母に話してるのをききましたけど……」

「ほう。ぼくには、親分肌のように見えたんですが」

「親分肌だけど、ケチだって人もいるでしょ。勝手なお願いで申しわけないんですけど、わたし、その辺のことがはっきりしないと、とても落ち着かないんです。佐藤社長に会ってお願いしたいんですけど、一緒に行っていただけませんかでしょうか」

「あなたと一緒に……」曾根は一瞬、絶句した。「もちろん、ぼくは、結構ですが……」

「それじゃ、明日はいかがでしょうか」

「明日？ 明日は日曜ですが……」

「わたし、勤めてますので、佐藤社長が会って下さるなら日曜日の方がいいんです。ご迷惑でしたら、わたしひとりでも訪ねてみますが……」